



2014/4/1 No.65

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

発達とその支援を考える



副理事長

木下 勝世

「発達」と聞くと誰もが右肩上がりの向上をイメージします。「文明の発達」とか「技術の発達」とかいう具合に用いられる言葉だからです。実際国語辞典を開いて見ても、同様な趣旨のことが書かれています。

けれども人間について「発達」を定義すると全く違ってきます。手元にある用語辞典には、「発達とは、人間の誕生から死に至るまでの非可逆的な、方向性をもち、いくつかの構造的な節目をもった行動的、人格的な変化の過程である。」と書いてあります。少し乱暴な言い方をすれば、発達とは生まれてから死ぬまでの、人間の生活の仕方や人格の変化そのものを言うというのです。つまり人間は死ぬまで発達するのです。変な言い方ですが衰えていくことも発達なのです。

歩けなかった赤ちゃんが歩くようになり、走るようになり、跳ぶようになります。そしてそれは若者の時代にピークに達します。でも発達はこれで終わりではありません。やが

て歩く歩幅がせまくなり、ピッチも落ち、ついには膝の痛みを抱えるようになります。このような下り坂の変化もまた人間にとっては発達だということです。

発達を支援するということは、その様な生まれてから死ぬまでの変化の中に生きるすべてのステージで、人がその人ならではの、そしてその時ならではの今を、充実させて生きるように支援するということです。赤ちゃん一人ひとりはその子らしさをもっています。一人の赤ちゃんが、赤ちゃんとして、その子らしく、今を充実させて生きるようにしてあげることが発達を支援するということです。障害のある人にもかけがえのない今があります。お年寄りも皆一人ひとりかけがえのない今を生きています。それぞれの今をその人らしく、豊かに、充実させて生きると手伝いをするのと、これが発達を支援するということです。

発達の支援は支援する側から支援される側への一方通行でなく、相互関係のものであります。赤ちゃんのお世話をするお母さんは、そのことを通して母親としての今を充実させてもらっているのです。お年寄りの介護をする青年は、そのことによって自分の今を価値あるものにさせてもらっているのです。お互いに「あなたがいてくれてありがとう」と言い合う関係、これが支援の関係なのです。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

サッカー観戦



施設長 目黒 眞理

ソチオリンピックでの浅田真央選手の素晴らしい演技と、精いっぱい自らの世界を表現しようと伝わってくる表情に、心を動かされた職員達とは違い、マナの家の子ども達は、羽生選手の金メダルにさえ、全く関心がありません。「ボーイフレンドがサッカー中継をテレビで観ていて終わるまで携帯に出てくれない」と訴える子もいる中、本人達はスポーツ全般に興味が薄いのです。

社協からの招待で先日、Jリーグチャンピオンのサンフレッチェ広島と、天皇杯チャンピオンの横浜F・マリノスが戦うスーパーカップに、国立競技場へと出掛けました。仕事と学校以外の時間はすべて、デートかパソコン・携帯の操作に使いたい子ども達。休みを合わせることが難しく、揃って外出の機会はないかなか持てないのですが、この日は全員の休みを合わせることができました。

吉祥寺のおしゃれなイタリアンの店で、それぞれ好きなパスタとデザートを選び注文、気がつくと集中しているせいか皆無言になっていてビックリ！。ランチの後、好きなおや

つと飲み物を買って、競技場へ。席は聖火台のすぐ下で、ピッチ全体、スーパービジョンともに観やすい席と喜んだのは職員でした。聖火台に興味を持ちたり、応援歌を覚えて一緒に口ずさんだり、歓声をあげて試合を楽しんだのは一人だけ。他の子はお菓子を食べながら、携帯やゲーム、音楽に気を取られ、目の前で繰り広げられる生のサッカーには興味なし。その後、試合の新聞記事、テレビのスポーツニュースにもその一名だけが反応。それでも、「また皆で出掛けたいねー」とは子ども達の一致した声でした。

あらたな体験への好奇心はあっても、それを素直に言葉や行動で表現できず、競技場で応援の掛け声に自分の声を合わせるのも恥ずかしい、売店に誘っても興味がない態度を取るなど、新しいことや変化への対応が苦手で、彼女達が避けていることでもあります。

それでも、新しいことを経験した彼女達は、周囲の大人や友達に「行ったことあるよ」「知ってるよ」とさりと話せたことがとてもうれしかったと、後で耳にすることがあります。

クールな態度で一旦は断られても、声をかけ続け一緒に出掛けることで、楽しく新しい体験を少しでも増やして行けたら、そしていつか彼女達がサッカーを観ながら「ヤッ

ター！」と自分の喜びを素直に表現できるようになれたらと思っています。

婦人保護施設 望みの門学園

学園に来て思う事



調理指導員 加瀬 愛子

早いもので、学園に異動になり一年が経ちました。異動辞令が下りた時、私は学園で勤められるのかとても不安でした。正直、今もその不安が無くなった訳ではありません。食事を提供していれば良かった立場から、利用者支援が大きく求められる立場に変わったからです。異動後感じたのは、学園は見た目と違いとても大変な所というのが第一印象でした。毎日のように繰り返される利用者同士の喧嘩や採め事…。平和に一日が終わる事はまずありません。掴み合いの喧嘩になる事もたまにあります。初めて間の当たりにした時は、胸がドキドキしてしまい仕事になりました。

学園は楽な所というイメージがあります。が、そんな事は決してありません。私も異動になる前はそう思っていました…。注意をされて素直に返事が出来る人も居れば、物に八つ当たりをする人、泣き叫びながら自己主張

ばかりする人、ご飯を食べなくなる人、病気を自分で作ってしまう人、薬に依存する人など、利用者一人ひとりの返答はさまざまです。利用者支援はとても大変であり難しいと感じる事もしばしばです。ですが、根気よく話を続けると理解をしてもらえ、事があります。信頼関係が出来、心から利用者と会話が出来た時、初めて利用者支援が上手くできたと感じる瞬間です。その時に見せてくれた笑顔は忘れられません。

利用者と信頼関係を築く為には、職員同士での密な報告など、「あなたはみんなが見ている。」という事を分かってもらう事が大事なのだと思えます。ある利用者に言われた事があります。「なんですそんなに私の言いたい事がわかるの?」と。「なんでだろうね」と返答をしました。小さい事の積み重ねが信頼出来る



職員を生み、悩みや嬉しい事など心の会話が出来るのです。

学園は、社会復帰を目的とした施設です。日中は外に働きに行く人、学園の中で、畑・工房に分かれ作業を行なう人、利用者一人ひとりと向き合い規則を設けています。時には、規則のある施設生活が嫌になり逃げ出す事もあります。そんな時は、根気よく向き合い会話をします。みなさんの中には厳しく注意をしている現場を見たことがあるかもしれません。勘違いしないで下さい。利用者との信頼関係があるから出来る事なのです。

この場を借りてみなさんにお願ひがあります。いろいろな事情があり、学園にて生活をしていきますが、みんな根本は素直で優しい人たちばかりです。法人の為に環境整備などで利用者を見かけた事があると思えます。その時は、一言でもいいです。「御苦労さま」と声をかけて下さい。

社会との隔たりを感じている利用者にとって、その一言がとても励みになり、明日からの活力になります。

学園は閉ざされた部分があり、多くの方が誤解をしていると思えます。開かれた学園を目指し、日々利用者支援に取り組んでいきたいと思えます。

養護老人ホーム 望みの門 楽生園 お料理クラブ



栄養士 星野沙也加

楽生園では月に一度、生活相談員・栄養士が企画してお料理クラブを開催しています。ベースト食を食べている方から常食の方まで全ての利用者の方が召し上がることで、できるものをということ、ホットケーキや豆腐入り白玉、クレープといったものを作ってきました。

調理を利用者の目の前でやることにより、出来上がっていく過程や料理の香りをより近くで感じる事ができ、普段の食事では摂取量の少ない方でも積極的に召し上がっている姿が見受けられます。その中でも退院後、食事量も低下していた利用者の方が、出来上がったものを笑顔で「美味しい美味しい」と言いながら召し上がる姿は私の中で印象的でした。人間にとって視覚や嗅覚への刺激は、食欲の向上に繋がるといふことが再確認できました。

日頃、食事を作っている姿が見えず、配膳された食事を召し上がっていると、どうしても食事というものが受動的な行為となってしまうところがあるように思います。

しかし、月に一度でも食べ物を近くに感じる機会を設けることにより、少しでも食事から自ら食べたという意識を持ち、能動的な行為へと繋がっていくことが出来ると思います。



自立している方を対象とした施設である楽生園の特性を活かし、今後は畑で栽培した季節の食品を使用したり、利用者の方々を中心とし企画・実行をしていき、職員がサポートしていくような形の料理クラブが出来たらと考えています。

料理を作ることを通し、利用者間のふれあい、自主性の向上に繋がるようにこれからも充実したクラブ活動を開催出来るよう工夫していきたいと思っています。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘 医療・福祉への挑戦



富津地区健康管理室室長 千葉 章貴

この度、富津地区健康管理室長に任命されました千葉^{ちかば}章貴です。平成二十二年八月に入職し、約三年半が経過しました。この場をお借りして、自己紹介をさせていただきます。

私は昭和五十三年に岩手県一関市で生まれ、高校を卒業するまで緑あふれる大自然ですくすくと育ちました。その後、海上自衛隊に入隊し、【護衛艦でしお】という艦船で射撃員として勤務しました。射撃員というのは、護衛艦に搭載されている大砲やミサイル等の運用を行う部署で、大砲の整備で毎日のように油まみれになっていました。ある時、上官に「衛生員



をやってみないか？」と言われました。軍隊といえば大砲や機関銃、ミサイル、魚雷等の攻撃職種が人気で、正直私は興味ありませんでした。上官に言われるまま衛生(看護)学校の選抜試験を受けたら合格しました。

兵役中に看護師と検査技師の二つの医療資格を取得し、衛生員として自衛隊内の病院や医務室で勤務してきました。

いつしか欲を抱くようになり、高度で最新の医療が学びたいと自衛隊を退官し、館山にある徳洲会系列の病院に就職しました。徳洲会は全国規模の大きな医療法人で、在職中は山形や東京に応援勤務に行ったりもしました。私は、障害者病棟で勤務していました。障害者病棟とは、最近よく耳にするALSという病気やSLE、パーキンソン病、ギランバレー症候群等の治療法が確立されていない難病の患者様を看護する部署です。

ある転機を迎え、婦人保護や老人、児童障害者等の福祉事業を幅広く行っている望みの門に興味を持ち面接を受けました。福祉に対する法人の熱い情熱に感銘を受け、自分も何か役に立てないかと模索しながら毎日仕事をしています。

これからも福祉の担い手として、多くの利用者へ健やかで安らぎのある日々を提供できればと考えています。

特別養護老人ホーム 望みの門 富士見の里

ユニット開設から一年

介護員 和田 麻里

のぞみ会で初めてとなる富士見の里の三つのユニットが開設してから一年が経ちました。まず平成二十四年九月に和ユニットがスタートし、十二月に雅ユニット、平成二十五年一月に悠ユニットと続きました。

ユニット型が従来型と大きく違うのは人数です。従来型は三十人、四十人単位で生活しますが、ユニットケアは一つのユニットが十人で食事、入浴等の生活をしていきます。すべて個室というのも特徴の一つです。少人数でケアを行うことで、家庭的な雰囲気の中でよりその人らしく、今までの暮らしが継続できるよう、私たち介護者もサポートがしやすくなります。

また、ユニットごとに違ったカラーが出せることもユニットケアならではの思いです。

私の所属する雅ユニットでは、趣味の折り紙や読書をする方、俳句を詠んだり、詩吟の練習をされる方など様々に毎日を過ごされています。私が最近嬉しかったことは、ある利用者様の変化です。

その方は認知症で一年前はベッドに横に

なっていて過ごす事が多く、なにをするにも

意欲がなく食

事も介助が必

要な程だった

のですが、少

しでも興味の

ある事はない

かと考え、ご

家族にも話

を聞いたところ、以前は編

み物をしていたとの事で、さっそく毛糸とか

ぎ針を持って来て頂きました。

それでも簡単にはいかず時間はかかりまし

たが、今では毎日のように編み物をされるようになりました。

以前に比べ徐々に出来る事も増え、何より

やろうと思う意欲が出てきたことがとても嬉

しく思います。

もちろんうまく行く事ばかりではありませんが、利用者様の笑顔や知らなかった一面を発見することの喜びを励みに、これからもその人らしさを探していきたいと改めて感じさせられる出来事でした。



老人デイサービス事業 望みの門 デイサービスセンター

明るいデイサービス

介護員 増田すみよ

去年八月からデイサービスに配属されて、八か月となりました。

毎日、午前中に入浴を済ませ、昼食は利用者の方々と会話しながら一緒に頂きます。

午後はリハビリ体操、壁画作り、散歩等を行っています。壁画作りは、今回は春のテーマで、桜の花、桜の葉を折り紙で折って頂き、

出来上がり壁に貼って完成させました。折り方を教えると皆さん、「上手に折れないわよ」等とおっしゃっていましたが、とても上手に出来上がりました。

日曜日営業もあり、毎回「何の行事にしようか?」、とか職員で話し合い、行事が決まれば、段取りを考えて利用者様が楽しんで頂



けるようにと工夫しています。

利用者様は豊かな経験を積んで来られた方々なので、「こうした方が良いわよ」と、教えて頂く事も度々あります。先月は海苔をつくりました。海苔が綺麗に広がらないのを「おかめ、ひょっとこ」と言うのだと教えて頂き一緒に大笑いしました。

私に何らかの落ち度があるでしょうに、「貴女はいつも明るくて元気だね」とか、「明るい声で元気が出るわ」等と、優しく、暖かい言葉を掛けて下さいます。身体的にハードな時もありますが、優しいその声掛けに忘れちゃいます。

利用者様あってのデイサービス。

利用者様の毎日の笑顔が見たいので、明るくアットホームなデイサービスでありたいと思います。思い日々職員一同頑張っています。

一年経って……



看護師 岡 和子

望みの門訪問看護ステーションにて勤務させて頂いております。岡と申します。早いもので、のぞみ会に訪問看護ステーションが設立されて一年が経とうとしています。

ステーションの立ち上げには力添えできま

せんでしたが、開所に向けて奔走する渡邊所長の姿を見て、立ち上げまでの大変さを感じたことがつい昨日のように思い出されます。

しかし、多くの方のご協力もあり開所当初は八名であった利用者が現在では二十名となり、徐々に訪問件数も増加の傾向にあります。

介護負担の軽減やADLの拡大をはかれた利用者方を見ていると開所までの苦労も無駄ではなかったのではと思います。この二月には季刊紙「さくら草」を発刊することができました。これを元に、訪問看護を皆様に知って頂けるように努めてまいります。

私ものぞ

み会の一員として一年

が経過しようとしてい

ます。一年経て利用者

さんとの関わりも当初

に比べ幾分に慣れてきた

様に感じま



す。利用者さんやご家族から「また来てね。」と言われると嬉しくなり、明日もまた頑張ろうと言う気持ちになります。

まだまだ未熟な部分が多く、毎日勉強の日々ですが利用者さんの言葉掛けや、訪問スタッフの支えを励みに寄り添う看護に努めて行きたいと思っています。

四月一日には富津市から委託を受け、社会福祉法人ミッドナイトミッシェンのぞみ会が、富津地区の地域包括支援センター事業を開始します。

福祉、行政、医療が連携しながら地域の高齢者の皆さんを支えられるよう、一職員として努めて行きたいと思っています。

昨年、日本財団の公募にて法人より軽自動車を獲得して頂き、今年三月に訪問車として訪問看護ステーションに納車されました。それまで訪問車は一台でしたので今回の納車は大変嬉しい出来事になりました。日本財団マークがカラフルでとても可愛いデザインとなっています。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。



就労継続支援事業 望みの門 新生舎 一般就労を目指した 支援から学んだもの

職業支援員 榎本八重子

新生舎では就労支援の場としてのぞみベーカーリー・エコクラブ・おりひめ倶楽部の三部門があり、現在四十名の方が毎日出勤しています。その中で今回は就労に向けた取り組みのひとつをご紹介します。

一般就労に向けて先ず取り組んだことは「大人としての扱い」「大人として振る舞う」「自分勝手なことはいらない」として「職場のルールを守る」ことを重点課題として始めました。

その次の段階として職場見学を行い、本人から「実習に行きたい」「実習に行きます」という言葉が出てくるのを待つこととしました。その間、施設では作業時間はせいぜい五時間程度というところですが八時間労働に耐えられるよう週三日の早出勤を行うなどできる限り職業生活に近い環境を設定することとしました。

また、本人に対しては今後の将来について社会自立や職業生活といったものがどの様なことなのか具体的に説明する機会を何度も持ちました。

そして待つこと二年。待ちに待った本人からの「実習に行ってみよう」という言葉が随所に出てくるようになりました。さあ実習に向けた取り組みの開始です。就労や職業生活の具体的なイメージを持つことはなかなか難しいところですが、実際の体験や経験をどれだけ積むかが大切です。

最初は全くの体験としての実習を行い、二回目・三回目の実習は職場定着を目標に繰り返し行っています。当初とても不安に思っていた電車通勤にも慣れ、実習を重ねるごとに彼に対する職場の評価は高まりようやく就職に至ることとなりました。



た状況確認などを繰り返しアフターケアに努めたところですがそれから一年余りで彼の職業生活は限界を迎えます。

よく言われることですが「させるのは簡単。でも維持したり継続したりすることは難しい」これを就労という言葉に置き換えると正にピッタリ。改めて私たちの支援がどれだけ大切なのかを痛感することとなりました。

就労が継続できなかった原因としてはコミュニケーション能力の不足や仕事以外の楽しみや余暇を見いだせなかったことです。これは障害があっても健常者であっても同様なことだと思います。

障害を持っていても当たり前に「地域社会で暮らす」といった社会的自立の実現に向け私たち援助者ができることは何か。今回の一般就労に向けた取り組みを通して改めて考えることとなりました。

私たち援助者は利用者一人ひとりの持っている力を見いだし、その力を最大限に発揮させることができるような支援を心がけなければなりません。経験したことのないことをどれだけ体験させることができるかを考え、「一人ひとりの可能性を信じ、決して諦めない」ということを念頭に今後も取り組んでいきたいと考えます。

定期的な職場訪問や帰る時間に合わせ

共同生活介護・援助事業 グレースホーム グループホームとケアホームの二元化

世話人 樋口 千恵

平成十五年四月、社会福祉基礎構造改革の一つとして、それまでの措置制度から支援費制度へ移行し、知的障害分野も大きく変化しました。

この支援費制度は「障害者の自己決定を尊重し、利用者本位のサービスの提供を基本とする」とともに、施設と利用者との対等な関係に基づき障害者自らがサービスを選択し、契約によりサービスを利用する仕組み」と謳われていました。

しかし、この支援費制度が定着を見ないうちに、平成十八年四月からは障害者自立支援法が制定され、同年十月に本格施行となりました。その中でこれまでのグループホームは共同生活援助（グループホーム）と共同生活介護（ケアホーム）の別個の二つの事業と位置づけられました。

グループホームは障害程度区分「非該当」および「区分1」の方、ケアホームは障害程度区分「2以上」の方を対象にするというものでした。

グレースホームは自立支援法の下でグルー

プホーム・ケアホーム一体型事業所として運営を行ってきましたが、昨年から施行された障害者総合支援法の定めにより、本年四月からは、グループホーム・ケアホームが一元化され、再びグループホームとして運営することとなったのです。

新たなグループホームは、介護サービス包括型と外部サービス利用型の二つに分けられます。介護サービス包括型は、これまで通り世話人・生活支援員を配置し、当該事業所が支援・介護にあたるもので、これまでの形態とさほど変わりがないものとなっています。外部サービス利用型は、これまでの支援・援助を外部の居宅介護事業所に行わせ、その手配のみを行うものとなっています。

グレースホームはこのどちらかを選択することとなるのですが、現状の利用者はケアホーム対象者が多いこともあり、グループホーム（介護サービス包括型）として新たな船出をすることとなります。

障害者福祉は、今後もより良いサービス・支援・介護（？）を目指し改革（？）が行われていくことでしょう。そのたびに私たちは戸惑い、悩み、問題提起していかなければなりません。

しかし制度がどんなに変わろうと、利用者一人ひとりが明るく笑顔で充実した日々を送

れるよう、これまで以上に精一杯頑張っていると思います。

一年を振り返って

管理者 藤崎 美智

今年の冬は、全国各地から近年にない大雪による被害が報告されました。積雪があまり見られないここ富津も、真っ白な雪景色となりびっくりさせられました。雪はすっかりなくなってしまうましたが、まだまだ寒さが続いて桜の花の便りが待ち遠しいところでは

す。さて、今年回はヨカデイサービスセンターの一年を振り返ってみたいと思います。五月は白久農園でいちご狩



り。また、八月のミニ夏祭りは、ヨカデイサービスセンターの前庭でのバーベキュー。十月のサツマイモ堀り。十一月末には志駒紅葉ロードに紅葉狩りと「かなや」での海鮮バーベキューの昼食。新年会では、いそね寿司の翔太さんによる寿司の握り実演と、みなさんに沢山の楽しい思い出ができました。

また、地域活動支援センターとしてのヨカデイサービスセンターでは、色々な創作活動を行っています。十一月末に楽生園と紫苑荘との連絡橋にて感謝祭の展示が行われ、法人内の各施設での作品が展示されました。ヨカデイサービスセンターでも、日頃の成果をみていただきこうと作品作りに励み、展示させていただきました。今年は、みなさんが作った作品それぞれに名札をつけ、額に入れたことで作品がより一層素晴らしいものになりました。みんなで作品展を見学に行き、飾られた自分の作品を見つめる姿は誇らしげでした。

また、十二月の法人合同クリスマス会では、器楽演奏を発表しました。器楽演奏に取り組んでから三年目になります。今年の演奏は、「365歩のマーチ」「おもちゃのチャチャチャ」「高校三年生」の三曲でした。大きな舞台に立って緊張して顔がひきつってしまった方もいましたが、演奏は普段通りに楽しく行うことができ拍手喝采をいただきました。

このように日頃の活動をみなさんに観ていただくことは、利用者のみなさんにとって大きな喜びや生き甲斐につながります。今後も、ひとりひとりを活かすことができるような活動に取り組んでいきたいと思っています。

例年季節の変わり目には、風邪などでお休みする方がいらっしゃいましたが、今年度はみなさん毎日元気で通所されました。健康管理の大切さを痛感すると同時に、このような充実した一年をみなで過ごすことができたことに感謝したいと思います。

千葉の中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 生活困窮者自立支援制度について

センター長 西山 信男

千葉県の中核地域生活支援センターの二〇一二白書の分析では、相談者の中で障害のある方（手帳または自立支援医療該当者）の割合は七割にのぼりますが、最近では障害の無い方からの相談が少しずつ増えていきます。さらに全体の三割が、経済的困窮について相談してきた方でした。

障害のある方が生活困窮であるとい概に言えないのですが、障害者福祉の施策からもれた人たちも、結果として経済的困窮の状態に

なったりと考えられます。また、経済困窮のニーズをもっている方が、それ以外に併せ持っているニーズをみると、「仕事に関すること」「介護・支援サービスに関すること」

「家族関係の悩み」「住まいに関すること」「医療に関すること」「財産管理・金銭管理」「家庭内の暴力・虐待」と多くの問題を抱えていることがわかります。

さて、千葉の中核地域生活支援センターの「幾種もの制度からもれた方々の支援」をモデルの一つにした国の制度『生活困窮者自立支援法』が昨年末に成立し、平成二十七年四月に施行されます。これは、生活保護に至る前の段階での自立支援強化を図るため、福祉事務所設置自治体等（全国七九〇市）に必ず置かれます。必須事業の「自立相談支援事業」「住居確保給付金」と「就労準備支援事業」「一時生活支援事業」「家計相談支援事業」「学習



支援事業」の任意事業があります。中核センター連絡協議会では、この制度について昨年来検討、話し合いを続け、千葉県社会福祉協議会と共同で勉強会を実施しています。

君津ふくしネットでは、中核地域生活支援センター事業、障害者グループホーム等支援事業、圏域四市障害者虐待防止センターと同様、君津圏域四市からの事業委託を考え、各市の社会福祉協議会や障害者就業・生活支援センター等とも連携し、「誰もが、住み慣れた地域で、安心して生活を続けることが出来るよう」率先して地域福祉に取り組み、新たな資源づくりに努力したいと思います。

富津市富津地区地域包括支援センター

四月一日開設します

管理者 門馬 靖子

これまで富津市では、市内全域を富津市包括支援センターとして、市役所内に窓口を設け高齢者等の保健、福祉、介護及び介護予防に関する総合相談や支援、介護予防マネジメントなど包括的支援事業を行ってきました。平成二十五年十月、地域包括支援センターを市内の三日常生活圏域に各一ヶ所設置するため、運営する受託法人の募集がありました。

日常生活圏域とは、その住民が日常生活を営んでいる地域として、地理的条件、人口、交通事情、その他の社会的条件を考慮して設定された区域です。富津市は、富津地区・大佐和地区・天羽地区の三つの日常生活圏域を設定しました。

望みの門では、富津地区に応募しプレゼンテーション等を経て、このたび富津地区の地域包括支援センターを受託することとなりました。かねてより富津市と引き継ぎ等により設置準備を行ってきましたが、「富津市富津地区地域包括支援センター」として平成二十六年四月一日より事業を開始することになりました。設置場所は、君津ふくしネットと同建物の一室となります。

職員は看護師、社会福祉士、主任介護支援専門員、事務員、指定介護予防担当の介護支援専門員等で六名の職員構成となります。

業務の内容としては、富津地区の六十五歳以上の高齢者に対し、介護予防ケアマネジメント、総合相談、権利擁護、包括的・継続的ケアマネジメント支援を各専門職が担当し行っていくます。その他、富津市指定事業として業務は広範囲であります。地域の高齢者が地域で安心して暮らすことができるよう多職種協働や地域の関係機関との連携を図ります。営業時間は八時三十分から十七時三十

分までとし、三百六十五日二十四時間体制で業務にあたります。

四月に入り、やるべきことが山積し、戸惑うことの多い毎日となりそうですが、職員一同新たな業務に精一杯取り組む所存です。皆様にもご相談等、ご協力いただくこともあるかと思ひます。どうぞよろしくお願いいたします。

児童養護施設 望みの門かずさの里

かずさの里に就いて



児童指導員助手 鎌田 洋一

私は、平成二十四年九月一日望みの門かずさの里に就職・お世話になることになりました。改めてですが、かずさの里は、東京湾を見下ろせる高台に位置し、西は三浦半島・富士山を臨み、東は、鹿野山の山々の大自然に恵まれ、子どもたちが安心して生活し、学ぶ家としては最高の環境が整っています。

その環境の中で、かずさの里は、各家庭・家族の事情を背負い、様々な思いを抱えながら懸命に暮らし、支え合っている大きな家です。その中、日々安全で安心な生活が出来るよう大人の一人として日々奮闘しています。暮らしの中で、親・家族がいない生活。外

出・学校行事等を考えても、隣にいるはずの家族がいない現実。一人ひとりのふとした姿を目にするたびに、「つらいよな、でも負けるなよ。」の思いを強くしました。

様々な思いを頭の隅に置き、まず現実の本人をしっかりと受け止め、家庭に育つ子どもたちに引けを取らない強い人に育って欲しいとの思いを込めながら見守っています。

就学前の幼い子どもたちには、良く食べ・良く遊び・良く寝る等の生活のリズムの中で、健全な心と体を養って欲しいと願います。

小学生には、勉強も大切にしながら、明るく元気に遊び、規則正しい生活を通して、たくましく成長して欲しい。中学生には、思春期である難しい時期でありますが、学業と部活動の両立を図り、自分の夢・目標に向かって切磋琢磨して欲しい



いと切に願います。

高校生には、現実を受け止めながら「立派な大人になるんだ。」と言う気持ちで、自立に向けて前向きに取り組んで欲しいと強く思っています。

私にも家族があり子供がいます。子育てを現在も継続中ですが、子育ての大変さ・難しさを経験・体験している大人の一人として、その経験を生かし、里の子どもたちと葛藤して行くつもりです。

最後に、子どもたちに「自信を持って歩め負けるなよ。」のエールを送り、私自身も日々努力する事を誓いたいと思います。



乳児院 望みの門方舟乳児園

保育士 榎本 一代

「今日は、お二階に行く？」交代で入った職員に聞いてくる子ども達。「お昼寝起きたら、お二階でおやつ食べて、お風呂に入ろうか？」と答えると笑顔が帰ってきます。

今、方舟では、時々二階の管理人室を使い生活をしています。

始めのうちは物珍しい冷蔵庫を開けたり閉めたり、中の棚を出して遊んだりしています。

た。しかし、中におやつや牛乳や水分補給のゼリーを入れる様になると、皆、開けて遊ぶのをやめる事ができました。

大人の洋式トイレに座ることができると、皆喜んで座り排尿することができるようになりました。もちろん、いつも自分達が生活している一階の部屋にもトイレはありますが、子ども用の小さなトイレです。時々座り排尿しますが、二階のトイレのように先を争って座るわけではありません。

一階と違い、二階のお部屋は普通のお家と同じ様にできています。一階は子ども用に出ていますが、二階のお部屋は大人の人が生活出来るように ドアや鍵のかからない扉がついています。始めは物珍しく開けたり閉めたり、戸棚に入ったりしていました。勿論、階段にも慣れて来ています。勿論、階段にも…。

方舟は赤ちゃんの施設です。成長してお家に帰れる子、次の施設や里親さんに行く子様々ですが、急に普通のお家に戻って戸惑うことのないよう少しでも練習が出来ればと取り組んでいます。

もうすぐ年度代わりですが、もしかすると方舟を卒業する子が何人かいるかもしれません。この、二階での生活が子ども達の成長に少しでも役立ってくれればとおもいます。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家

人へのちと向き合うこと

相談支援員 中尾 実慧

児童家庭支援センター「望みの門ピーターパンの家」が開所して、早一年が過ぎようとしています。

当初は、フリースペースを利用する方が主でしたが、現在では、お子さんの発達相談、家族の問題に関するご相談が多数寄せられています。家族全体の支援を必要とするものが多く、しかも一回限りの相談ではなく、継続的な関わりを要するものがほとんどです。

お話を伺って思う事は、「家族の危機は、その個人個人の特異なものではない。」という事です。家族は、相互に作用し合うものです。誰しも、最初は自分の幸せ、互いの幸せを願うものだと思います。それがいつしか互いの感情のすれ違いや環境の変化等で、歪みが生じ崩れてしまう。これは決して特殊な事ではなく、私たちもこの危うさの狭間を行ったり来たりしているのです。

お子さんにはお子さんの人生がある様に親御さんにも親御さんの辿ってきた人生があります。「何故、現在の結果に至ったのか。」について考える時、同時に親御さん自身のこれ

までの経緯についても触れていかなければなりません。

お子さんだけでなく、親御さん自身はどこで育ち、どのような家族に見守られてきたのか、

どのような子ども時代を過ごしたのか、何が好きだったか、どのような仕事に就いたのか、どんな人との出会いがあったのか等、少しずつ時間をかけて触れていく事で、今まで見えなかったものがちらりちらりと垣間見えてきます。相談者の全てを理解する事は不可能でも、話を聴き、その人生に寄り添っていく事は出来ると思います。

相談支援に関わらせて頂く中で身に染みて思う事は、一つには、私たちは常に「人（いのち）と向き合っているのだ」ということ、もう一つは、「己と向き合っているのだ」ということです。私たちは、皆少なからず「生きづらさ」を抱えながら生きています。それ



らを「特別な出来事」として取り上げるのではなく同一の目線で、「この人の『生きづらさ』を少しでも軽減出来るポイントは何だろう。」また、「今どこを支えれば『生きる力』に繋がるのだろうか。」と網を広げて傾聴するので。与える側や与えられる側ではなく、共に考え支えていく姿勢が大事であると日々実感しています。

編集後記

この三月「笑っていいとも！」が三十二年の歴史に幕を下ろし、日本のお昼休みの顔であったタモリさんも惜しまれつつその使命を終えた。共演者から「タモさん」と親しみを込めて呼ばれ愛される姿は、テレビを通して私たちに安心感と目立ちはないがなくてはならない空気感を与えてくれた。

一方、創立五十二周年を迎える「望みの門」はこれからも歩み続ける。新生児から高齢者まで「発達」を続ける利用者に親しまれ愛される存在として。また誰もがホッと安心して地域で暮らせるよう、困った時にはいつでも傍で支える隣人として。

先達がこの地で醸成してきた福祉の業を私たちはしっかりと守っていききたい。この四月新たに加えられた仲間と共に。

(T2)